

短大生の文章力低下と幼児期の保育（教育）について

——「やる気」の形成と幼児期の主体的な遊びの意味を中心に——

佐藤 達全¹⁾

Decline in the Writing Skills of Junior College Students and Its Links with Early Years Childcare and Education:

A Focus on Forming “Motivation” and the Significance of Independent Play in Childhood

Tatsuzen Sato

Abstract

I have been tutoring composition in the Department of Early Childhood Education at a junior college for 30 years, and I have come to believe that serious problems underlie the written composition of recent students. This is not only because of a superficial problem of an “inability to write”; I have noticed that students lack the capabilities (basic academic competencies) to be Early Childhood Educators, and furthermore, that there are serious deficiencies in their essential qualities as people.

Therefore, While introducing students’ written compositions, I point out that the root causes of the problems therein lie with early years childcare and education, and I attempt to search for a solution to these problems.

Key words: Writing skills, independence, concentration skills, tenacity, self-control, play

キーワード：文章力，主体性，集中力，持続力，自制心，あそび

1. はじめに（問題の発端）

筆者が学生の書く文章が「おかしい」と感じるようになったのは、20年ほど前からと記憶している。それ以前にも学生のレポートに「誤字」や「当て字」はときどき見られたものの、文章の骨組みそのものがおかしいと感じることはなかった。筆者は長年、保育実習（保育所）の指導にも関わってきたので、実習日誌に書かれた文章を読む機会も少なくなかったが、学生のレポートと同様に、以前の実習日誌では内容はともかくとして、文章

の書き方そのものに問題があると感じることはなかった。

筆者がはじめて学生の文章力の低下を指摘したのは、育英短期大学研究紀要第19号（2002年2月発行）に投稿した「保育科学生の文章表現力について」においてである。そこでは、次のような事柄を取りあげた^(註1)。

- ①誤字や当て字が多いこと
- ②主語と述語の関係が正しく対応しておらず、文章の構成がおかしいこと
- ③助詞の使い方がおかしく、正しい日本語の文

1) 育英短期大学保育学科

章になっていないこと

- ④話しことばのまま書かれている部分が目につくようになったこと
- ⑤「見れる」「食べれる」はもとよりのこと、「違く」「やっぱし」など、最新の「はやり言葉」のような表現がしばしば登場すること
- ⑥「説明文」を書く場合、主語と述語が正しく対応していない文章が少なくないこと
- ⑦語彙が乏しいためであろうか、同じ形容詞や副詞を何回も繰り返し使っていること
- ⑧代名詞を使って表現することがほとんどないので、同じ「もの」や「人の名前」などを何度も繰り返して書いていること
- ⑨文章が長いため、「ので」や「が」といった助詞を用いてだらだらと続ける場合が多いこと（そのため、一つの文章が200字～300字も延々と続く場合が少なくないこと）
- ⑩推量表現（～ではないでしょうか）がほとんど見られないこと（これは、与えられることに慣れてしまった結果、事実には目が向かず、想像力が乏しくなったからではないだろうか）
- ⑪800字程度の文章を書くときに、一つも段落を区切ることがない学生も見られること
- ⑫文末表現がすべて「思います」や「です」など、ワンパターンであること

筆者の手元には、平成の初め頃の夏期休業後に提出してもらったレポート（1人当たりの分量は400字原稿用紙5枚以上としていたが、ほとんどの学生が10枚前後の枚数を手書きして提出している。約140人分）が保存されているが、上述した②から⑫に該当する文章を書いた学生は一人もいない。あえて記しておくなら、何人かのレポートに①で指摘した誤字（当て字）が見られるだけであるから、当時に比べると現在は隔世の感がある。

2. 学生の文章力低下と保育者の立場（役割）

ところが、それから10年後には上に指摘したような文章を書く学生が急増してきたのである。もちろん、そうした状況に手を拱いていたわけではない。それは、保育者にとって文章を書くことは重要な業務の一つだからである。前掲の拙稿ではそのことについて、次のように記してある。

文章力をつけることは保育科の学生にとって特に重要である。彼女たち（注：当時は女子の短大であった）が短大を卒業して保育者になったときには「園だより」や「連絡ノート」「保育の記録」など、文章を書くことを避けるわけにはいかない。

保育者は子どもと楽しく遊ぶことが目的ではない。「保育」という用語が示しているように、保育者の役割は①保護者から託された乳幼児の生命を一定時間保護すること ②そしてただ単に保護するのではなく、集団の中で望ましい成長・発達に向けての援助をすること という極めて高度な専門職として位置づけられている。

言いかえると、保育は「意図的・計画的な活動」であり、保育者相互の協働はもちろんのこと、保護者との情報共有が欠かせない。さらには、連続した成長・発達を保証するために小学校との連携も重要である。その仲立ちを確実なものにするためには文章としての記録が欠かせない。文章力が重視される所以である。

ところが、現実には学生の文章能力は決して十分なものとは言えないし、さらに困ったことに、自分の文章力に対して疑問すら抱いていない学生も少なくないのである（実際に授業をしていて驚いたのだが、15年ほど前に文章を書くことの意味について説明したところ、何人かの学生から「先生、文章は自分が分かるだけではいけないんですね」と言われたことがあった）。

こうした状況を踏まえて、筆者は文章指導を重

視することにしたのだが、そのことについては前掲の拙稿に次のように記してある。

そこで、これまでの文章の勉強について聞いてみたところ、必ずしも十分な指導を受けていないことに気づいた。(中略) これまでの作文指導がどうであれ、短大を卒業して幼稚園や保育園の現場に出たときには、最終学校での指導が問われることは否定できない。そこで、「国語表現演習」の授業では、「演習」という本来の目的に沿って、毎時間、文章を書いて提出させ、その問題点を指摘することにした。

ここで、文章力を身につけさせるための筆者の基本的な立場を紹介しておこう。学生に限らず、多くの人にとって文章を書くことは「苦手」であろうから、「面倒なこと」と敬遠する人も少なくないであろう。しかも、文章力の向上が一朝一夕に達成されることはない。

そのため、文章の書き方についてのノウハウを提供するための書籍は枚挙に暇がなく、しかも「すぐにでも書けるようになることをうたい文句にした」タイトルの本が毎年出版され続けているのである。こうした状況は、文章を書くことに悩む人がいかに多いかを物語る証拠なのだが、残念ながらそうしたタイトルの本を何冊か読んだからといってすぐに文章力が向上しないことを多くの人が体験しているはずである。

3. 文章力の向上は自分で書くことから

言い古された表現ではあるが、文章力を向上させるための王道はない。月並みのようだが、一番の方法は「よい文章を数多く読んで、その表現方法を学ぶこと」(そのため、古くから「作文は借文」と言いかえられてもいる)「コツコツと自分で文章を書いて推敲を繰り返したり、先生に間違いを指摘していただいたり添削していただいたりすること」ではないだろうか。

そこで、国語表現演習(この教科名になる前は

「文章作法」で、現在は「日本語の表現法」に変わっている)の授業では、

- ①いざという時の参考用として1回目の授業で「文章を書くための基本的な事柄をプリントした資料」(A4版2枚)を配布し、そこに示してある「書き方の基本」を説明しておく。その内容のほとんどは中学校卒業までにならっている事柄である。
- ②筆者が以前、保育者向けの某団体の機関誌に1年間連載した「話すことと書くこと」と題する12回の原稿(1回分は原稿用紙4枚)をプリントして配布したものを毎回の授業で学生と一緒に読みながら、話すことの意味や目的、話す時の注意、文章を書く目的や注意すべき点等について30分程度で要点を説明している。
- ③学生が書いた文章の中から参考になりそうな例文(もちろん、間違いを探して訂正するために適した文章であることは言うまでもない)をプリントしては配布し、学生を指名して間違いを探して訂正してもらう(A4の用紙1枚に10~15の例文が書かれている。ここに載せている文章は、学生が課題として提出した文章の中から選択したもので、多くの学生が間違っている表現や注意してほしい書き方などを基準にして筆者が選んでいる。このプリントを半期で5~7枚程度配布して正しい書き方を身につけるように説明している)。
- ④学生にとって一番の課題は毎週提出しなくてはならない400字の作文である。授業の中でテーマを示し、自宅で書いて次の週に提出してもらう。授業は15回なので作文も15回になる。初めのうちは400字の原稿用紙がなかなか埋まらないため、かなり苦勞する学生もいるようだが、何回か繰り返すうちに書き終えるまでの時間が確実に短縮される。内容はともかく、15回の課題をすべて提出しないと単位の認定は行わないと、1回目の授業で

約束している。

多くの学生からは「大変な課題」のように受け取られて、「イヤな教師」のレッテルを貼られかねないのであるが、筆者はあえてこの方法が続けている。それには理由がある。すべての学生に「二つのことに粘り強く取り組む姿勢を身につけてほしい」と考えるからである。そのために、15回の課題文は内容の善し悪しや書き方の上手下手かによって点数をつけていない。

もちろん、提出したか否かはしっかりとチェックするが、それは「15回の課題文を書き上げたという達成感を味わってもらうことを重視する」からである。そこで、厳しいように感じるかもしれないが、15回の課題文がすべて提出されない場合には、基礎点は0点になることを伝えて厳密に守っている。授業を行う際にも、そのことを繰り返し注意を促している。それにもかかわらず特段の事情がないのに全ての課題が提出されない場合は基礎点が0点であるから、50点満点の期末試験と合計しても60点には達しないため、単位の認定はできないことになる。

そして、筆者はもう一つ、学生に身につけてほしいと思って実行していることがある。それは「話をしっかりと聞く習慣を身につけること」である。これは人間（社会人）として必要なことではないだろうか。もちろん、文章をただ提出するだけでは正しい文章を書く力は身につかないため、筆者は提出された課題文にすべて目を通し、適切でない表現部分に赤ペンでチェックを入れて次の週の授業開始時に返却する。学生にはチェックされた部分を訂正するように指示している。その方法は辞書で調べても友人に教えてもらってもかまわない。それでも分からなければ、筆者の研究室を尋ねることは大歓迎と伝えている。

5回分くらいの課題が学生の手元にまとまったところで、訂正を確認した上で再提出をしてもらう。ここで、再提出された課題文の訂正の仕方の善し悪しを評価するのである。それは、文章を書

く力を確かなものにしたいためからである。赤ペンでチェックがついているにもかかわらず、訂正が行われていない場合や訂正が適切でない場合には減点をすると伝えてある。それは、「すればいいだろう」という姿勢が好ましくないことは明白であり、「きちんとする姿勢を身につけてほしい」からである。

因みに、ここ数年の課題を大まかに分類すると、

①自分と向きあうテーマ

②保育者として社会に目を向けるためのテーマの2種類にしている。参考までに、平成17年度のテーマは次のようなものであった。

①施設実習で感動したこと

②夏期休業中のできごと

③卒業後の希望

④幼稚園（保育園・施設・企業）に就職を希望する理由

⑤夫婦共働きについて考えること

⑥男女平等について思うこと

⑦いま、私が関心を持っていること

⑧私の弱点とその克服法

⑨保護者に勧めたい1冊の本

⑩幼児の虐待事件について思ったこと

⑪将来の夢とそれを実現するために努力していること

⑫少子化と日本の将来について

⑬10年後の私の生活

⑭この1年で成長したこと

⑮添削指導を受けて思ったことと今後の課題（800字）

平成30年度はその一部を入れ替えている。④

⑤ ⑥ ⑧ ⑩ ⑪ ⑫ ⑮ は変わらないが、新たに

①新学期を迎えての決意

②社会人にとって敬語は必要か？

③責任実習を体験して後輩に伝えたいこと

④赤ちゃんポストについて思ったこと

⑤冬期休業中に取り組みたいこと

⑥冬期休業中の成果と反省

⑦私の長所とその伸ばし方

の7課題を加えて、学生が将来のために社会に目を向けたり自分と向きあったりするきっかけになるよう工夫している。

その中で、これまで変わらずに示してきたテーマの一つが「添削指導を受けて思ったことと今後の課題」である。しかも、文字数が通常の倍の800字であるから内容はかなり掘りさげられていて、学生の文章力や短大に入学するまでに受けてきた指導の実態を知ったり筆者が指導の方法を考えたりするための参考になっている。

こうした取り組みの結果について、平成18年の全国保育士養成協議会第45回研究大会から平成24年の第51回研究大会で次のようなタイトルで報告を行った。

第45回研究大会「保育者をめざす学生の基礎学力について

…文章表現に見える問題点とその対応…」

第46回研究大会「保育科学生の文章表現に見える問題点（承前）

…学習習慣と基本的な生活習慣について…」

第47回研究大会「保育者をめざす学生の想像力を高めるための試み

…文章表現に見える問題を出発点にして…」

第48回研究大会「文章表現力からみた保育士養成の問題点

…短大生の学習意欲と基礎学力を中心に…」

第49回研究大会「保育者をめざす学生の生活と学習について

…大学全入時代の問題と保育者の資質…」

第50回研究大会「短期大学における保育士養成と保育者論

…学生の描く保育士像と求められる保育者の資質…」

第51回研究大会「書くことと話すことから見た保育科学生の問題と対応について

…基礎学力の低下と生活体験不足の中での保

育士養成…」

4. これまでの文章指導の転換期

上述のように、筆者はこれまで「どうしたら学生が適切な文章を書くことができるようになるか」を到達目標として指導を行ってきた。もちろん、15回の授業で十分な文章力を身につけることが期待できないことは承知しているのだが、それなりの手応えは感じられた。

それは、

①多くの学生が、文章を書く意味についての理解と必要性を多少なりとも認識するようになったこと

②15回の授業で、それまで間違えて覚えていた文章の書き方がある程度は修正されてきたこと

③卒業生から、授業を通して学んだことが保育者としての職務を遂行する上で役に立っているという声がときどき伝えられてくること
ところが、近年の学生が書いた文章を読んでいると、これまでのような文章指導が転換期を迎えているように感じられてきた。その理由は、学生の書いた文章がただ単に学生の文章力が低下しているという事実を伝えてくれるだけでなく、もっと深刻なメッセージが発せられていることに気づいたからである。言いかえると、文章の書き方の指導をするだけではこの問題の解決はできないということなのである。

筆者も以前は、学生が文章を書けないのは「基礎学力がないから（学力が低下しているから）」だと単純に考えていた。そして、コツコツと粘り強く文章の書き方を積み重ねることによって書ける（勉強すればできる）ようになると考えていた。ところが、最近の学生にその考えは通用しなくなった。「書けなくても気にしない」のである。もちろんこれまで通り、保育者になるためには「〇〇ができなくてはいけない」「〇〇が必要だ」

ということは幼稚園教諭免許や保育士資格を取得するためのさまざまな教科で繰り返し説明を聞いているはずである。

それにもかかわらず、保育現場で求められるレベルまで自分の力を近づけようとする学生は多くないのが現実である。なぜ、そうってしまったのであろうか。「信じられないでしょうが、大学生の10人のうち2人は小学生の算数ができません」というセンセーショナルな文章が記された『分数ができない大学生』（東洋経済新報社）が1999年に出版されてから大学生の学力低下の論争が始まったが^(註2)、「問題はそこにあるのではない」と教育学を専門とする秋葉英則（大阪教育大学教授）は言う^(註3)。

では、現在の大学でどんな問題が起こっているのか？ 大学生問題の最大の問題は実は低学力ではありません。大学生は分数もできないなんていわれますが、それはこれからお話することに比べたら、実に瑣末で一面的なことです。

（秋葉英則『エミールを読みとく』（清風堂書店：2005年）

と述べて、自立できない若者像についての問題を指摘している。そこで指摘されていることが今回の本稿で取り上げることにつながるので、秋葉の文章をもう少し紹介しておこう。

秋葉は次のように言っている。

恥ずかしながら、わが大学を例に挙げますと、学生は教育実習を経て教員免許を取得します。卒業に必要な必修単位でもあります。しかし、その単位が取れないのです。たしかに実習はつらく、疲れるものですが、毎日行っていれば取れる単位です。もちろん、いまの学生も毎日実習に行っています。それでも取れない。

その理由は三つあります。「あいさつができない」「遅刻する」「約束ごとを守らない」これは、わが大学だけのことではなく、全国的にそうなのです。

ここ数年は介護実習もあわせて行われるようになりました。学生は老人ホームなどに実習に行き

ますが、外部施設なので一生懸命指導していただきます。しかし、その学生は遅刻する。ぼーっと指示を待っている。さらに、指示されたことができない。指導する施設からすれば、この学生たちには教師になって子どもを指導してほしくないと判断されて、実習で不合格になるわけです（下線は筆者が加えた）。

大学生になっても、自分がめざす職業で求められる知識や技能を主体的に身につけようとしていないという指摘は近年、著しく増えている。

さらに最近「大学に（学生ではなく）生徒が在籍している」と揶揄するような論文が何本も発表されている。たとえば、黒河内利臣「生徒化した学生の授業への期待」（武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 5号：2015年3月）・杉谷祐美子（青山学院大学教授）「生徒化している大学生と学生化への移行」（第3回 大学生の学習・生活実態調査報告書：ベネッセ教育研究所2018年）などで、大学生の問題が指摘されているのである。

筆者が勤務しているのは保育学科であり、ほとんどの学生は幼稚園教諭免許と保育士資格を取得する。そして、卒業生のほとんどがその免許や資格が必要とされる職場に就職しているのであるから、入学してくる学生が保育者をめざしていることは明確なはずである。それにもかかわらず、目標達成のためにどのような知識や技能を身につけなければならないか（必要であるか）を考えようとする意識はきわめて低い。これは、短大入学までに「学ぶことの楽しさを体験する機会が得られなかった」という深刻なメッセージではないかと学生の文章から感じている。

この状況を放置しておくとも学生の状況が変わらないどころか、これからも同じ状況が続くことが予想されるので、その改善を図らなくてはならないと考えている。

5. 話がしっかりと聞けない短大生

すでに述べたように、筆者は学生に「話をしっかりと聞いて、求められていることを確実に実行すること」「しなくてはならないことにコツコツと取り組む姿勢を身につけること」を求めているのであって、「名文が書けるようになること」を要求しているのではない。人間として大切なことを身につけてほしい、あえて言うなら「子どものお手本になる」という意識を持って生活してほしい、「せんせい」と呼ばれる立場になるという自覚を持って行動してほしいというだけなのである。

このことは、1回目の授業を始める前のガイダンスで繰り返し説明している。そして、授業の開始時と終了時の挨拶の重要性を話して大人としての挨拶の仕方も実際に練習している。それにもかかわらず、次の週になると、前の週にしたはずの挨拶の形が崩れてしまう。50人足らずの教室で委員の学生の「礼」という号令でお辞儀をして坐るのであるが、「礼」と言う声に合わせてお辞儀をしないで着席する学生が何人もいる。起立をしたときの姿勢も顔の向きも、挨拶をする「形」にはほど遠い状況と言わざるを得ない。

しかも、着席したとたんに「学生同士の情報交換」が始まる。最初の授業で「着席したらテキストやノート・筆記用具を準備して授業に取り組む態勢をとるように」伝えてあったはずだが、そのようなことは1週間できれいさっぱりと頭から消え去っているのである。

道徳的な事柄はここまでにして、毎週提出される課題文の問題点を指摘しておこう。繰り返すが、筆者が学生に求めていることはあまりにも平凡なことである。それは「粘り強く取り組む姿勢を身につける」ことと「話をしっかりと聞く習慣を身につけること」である。学力のあるなしには関係のない事柄なのだが、このことがしっかりと実行できるようになると学力も自然に身に付いてくると筆者はこれまでの経験から考えている。そこで、

授業ではいくつかの「しかけ」を設定している。

- ①毎週の課題と組・氏名は、原稿用紙のマス目の外側に正しく書き、本文は1行目から書くこと
- ②原稿用紙の左肩の部分に直径約2センチの○を書き、その中に課題の回数を示す数字を書くこと（○の大きさをおよそ2センチと指定している）
- ③文章は原稿用紙の最後の行のどこかで終わりにすること（できるだけ400字に近づけ、原稿用紙の半分くらいで投げ出さないようにするため）
- ④原稿は連絡帳を書く時の練習も兼ねて敬体（です・ます）で書くこと
- ⑤再提出を指示した時は、若い番号の原稿を上にして重ね、右肩の部分をホチキスで1カ所留めて提出すること

「なんと細かなことまで指示するのだろう」と感じるかも知れないが、残念ながら学力だけでなく、基本的な礼儀作法や挨拶の仕方も十分には身に付いていない学生を対象にしている。そして、かなりの学生が中学から高校での勉強に「自信」を失っているという現実がある。それだけに、筆者はこうした対応（一つ一つをきちんと行う）から始める必要があると考えたのである。

実際に、本年度（平成30年度）第1回目の課題「新学期を迎えての決意」の原稿に目を通すと、題名が正しく書かれていない文章が約4割にもなっている。筆者は「新学期を迎えての決意」という題名を少なくとも3回は繰り返してアナウンスしたのだが、2割程度の学生は「新学期に向かった決意」と書いていて、「新学期を向かえての決意」と書いた（「迎える」という漢字が正しく書けない）学生も2割ほど見られた。

これは一例に過ぎないが、話がきちんと聞けないのであるから、授業の内容をしっかりと理解することも覚束ないのではないだろうか。そのため、筆者は何度も「しっかりと聞いて、それをメモし

て実行することが大切」と繰り返し学生に説明した上で、提出された原稿を読む際にはそのことも含めてチェックしている。次の週に返却するときは、気になった点を発表して「就職したときは話をしっかりと聞いて確実に実行することが大切」であるということも付け加えている。これを4～5回くり返していると、少しずつだが学生はこちらが求めたような行動をするようになってくる。

また、話をきちんと聞いていないだけでなく、注意力や集中力の不足（欠如）も気になるところである。次に紹介するのは、実習日誌に書かれた「本日の実習の振り返りと今後の課題」という13行の文章である。まず感じたことは、実習指導の授業で「13行のスペースに〈一日の振り返りと今後の課題〉というテーマで書くのだから、二つの段落に分けて書く」と指導の先生も読みやすい」と指導しているのだが、段落を分けて書いた学生がわずか数人しかいなかったことである。

次に、文章表現の問題点を指摘してみよう。そこには日誌を書くことに対する注意力や集中力が欠如している学生の実態が如実に表れている。

- ①今日は4歳児のクラスに入りました。いろいろなコーナーで、子どもと話しました。一人ひとりが遊びたいコーナーで楽しんでいました。その中の一人の女の子が話しかけてきました。
- ②今日で実習の半分がおわり、子どもの名前もだいたい覚えて楽しく過ごしました。これからもっと多くの子と楽しく遊びたいと思いました。
- ③今まではゼロ歳児と接したことがなかったので、どのように接したらよいか心配でした。
- ④しっかりと準備して臨んだつもりでしたが、準備が足りないと感じるものがたくさんあったので、次はもっと準備をして望みたいと思いました。

このように、わずか数行の文章を書いているにも

かかわらず、繰り返し登場する漢字の一方は正しくてもう一方が間違っている例は非常に多いので、次に示しておこう。

- ①知る→しる（初めは漢字で書いているが2回目は仮名で書いている）
- ②気づく→気づく（初めの送り仮名は正しいが2回目は間違っている）
- ③驚く→驚ろく（初めの送り仮名は正しいが2回目は間違っている）
- ④成長→生長（学生は異なった意味で書いているわけではない：念のため）
- ⑤送る→贈る（文章の内容に変化はないにもかかわらず漢字が変わっている）
- ⑥受け止める→受け取る（「止める」と「取る」の区別がついていない）
- ⑦得意→特意（発音が同じなら気にしないのかもしれない）
- ⑧自信がつかまりました→自身がつかまりました（漢字の意味を考えずに書いている）
- ⑨徐々に→除々に（「徐」と「除」の意味の違いを意識していない）
- ⑩困りました→困まりました（送り仮名の間違いも非常に多い）
- ⑪難しい→難かしい（この間違いも少なくなない）
- ⑫真剣に→真険に（「剣」と「険」も意味を考えて書いていない）
- ⑬積極的に→接極的に・責極的に
- ⑭快く→心よく（心が善いわけではないのだが）
- ⑮成績→成積（この書き間違いも非常に多い）
- ⑯慕われる→親われる（「慕う」と「親しい」の違いも意識していない学生は多い）
- ⑰接する→接つする（「接つする」と書いている学生も非常に多い）

漢字を覚えるときに少し注意すれば正しい漢字が書けるようになるはずなのに、授業前の挨拶の仕方からも伺えるように、これまでの生活で一つ

一つを「きちんと」する習慣を身につけてこなかったことが想像できる。実習日誌や課題文を読んでいると、こうした書き方をしている学生が非常に多いことがわかる。

そして、これと同様なことは実習指導をしてくださった先生のコメントや実習評価票の記述にも頻繁に見られる。たとえば、日誌に「完璧」「実習に望みました」と書いてあったときに「完璧でなくて完璧が正しい」「望みましたでなく臨みましたが正しい」と指摘されていても、同じ間違いを繰り返す学生が少なくないのである。

そのため、実習評価票にも、「指導したにもかかわらず改善されなかった」「何度も同じ注意をしたが、本人の意識が変わらなかった」といった立腹気味の指摘がしばしば見られるようになった。これなども本人に悪気はないのかも知れないが、話がきちんと聞けない（しっかりと指摘を受けとめられない）例ではないだろうか。

いずれにしても、こうした状況が改善されないと、保育者としての資質が問われることになる。その理由はすでに触れたように「保育」の語が答えている。保育者の役割の第一は「乳幼児の生命を保護すること」であるのだから、注意力が欠如した保育者には生命を託したくないと考えるのは当然であろう。

6. 指摘されても文章が正しく書けない

日本語の表現法の授業では、提出されたレポートの中から学生が間違いやすい文章を選んで「例文集」を作成して印刷し、文章を書くためのテキストとして用いている。文章の誤りを学生に指摘したうえで正しい書き方を答えてもらい、必要に応じて筆者が説明したり関連した事柄を付け加えたりしている。その内容をしっかりとメモして課題文を書くときに活用すれば、少しずつ文章力が向上するはずである。

実際に、以前の学生は半期の学習でかなり文章

力の向上が見られたが、すでに述べたように近年は転換期にきていると言わざるを得なくなっている。前の週にボードに書いて説明したことでさえ覚えていない学生がほとんどである。しかも、授業に対する反応や取り組む意欲も著しく低下してきて、中には1回目の授業から机に突っ伏して居眠りをしている学生もいて、そのことは、文章の書き方にも如実に表れている。次に紹介する文章はすべて、主語と述語が正しく接続されていない例である。

- ①なぜなら、危害行為や育児放棄などから赤ちゃんの命を守ることができると思います。
- ②夫婦共働きのメリットと考えられることは、夫婦両方の収入があるということで、金銭的に余欲ができます。
- ③なぜなら、その親がどうして虐待をするようになったのか、親の方にも手を差しのべないとだめだと思います。
- ④優柔不断を克服するには、今できることはなにかを考えネットや知人、友人や短大の先生方に意見を聞きました。
- ⑤その理由は、死亡してしまったり虐待を受けてしまったりする前に、丈夫な体で育ててもらう方が良いと思いました。
- ⑥赤ちゃんポストについて思うことは、赤ちゃん一人ひとりの命を守る大切なポストだと思います。
- ⑦私は、夫婦共働きのメリットとデメリットがそれぞれ二つずつあります。
- ⑧私は幼児の虐待について思うことは二つあります。
- ⑨共働きのメリットは、収入が増えるので、片親だけが働いている家庭よりもゆとりのある生活が送れます。
- ⑩私が責任実習を体験した後輩に伝えたいことは、観察実習でよく先生の教え方や姿を見て学んで、真似して覚えることから、やっていくことが大切だと伝えます。

- ⑪虐待について思ったことは、この先虐待がなくなり子どもに愛情を注ぐ両親が増えてほしいと感じました。
- ⑫一番大切なことは、ひとつの命を守る赤ちゃんポストは必要だと思います。
- ⑬なぜなら、冬になると寒くて外に出なくなり家にこもってしまいます。
- ⑭なぜなら、私は子どもができれば、時には子育てに疲れてしまうこともあるかもしれないが、子どもに痛い思いや苦しい思い、辛い思いは絶対にさせたくありません。
- ⑮私が冬期休業中に取り組みたいことは、就職にそなえてさまざまな障害とその特性について考えています。

提出された課題文の中から一部を紹介しただけだが、最近はこのように主語と述語がつかない文章を書く学生が非常に多くなってきた。さらに、何らかの漢字を間違えて用いたり話しことばで書いたりしている例は毎回、8割以上の学生の文章に見られる。次に挙げた文章は筆者がチェックしたもののごく一部である。

- ①やむ終えない状況に陥ってしまった場合、苦しむ親を助けることもできます。
- ②親は子どもを手放したくないけど、なんらかの理由で子どもを育てることができないので、預ける人もいるのではないかと思います。
- ③最近、乳幼児への虐待や遺棄等痛ましいニュースが耐えられません。
- ④例え、離ればなれになっても忘れられないと思います。
- ⑤自分で生んだ子どもをポストに入れるなんて想像もつかないし、私は絶対に考えられません。

7. 乳幼児期に大切な「あそび」

それではなぜ、このように注意して聞いたり集中して聞いたりすることができないのであろうか。

その鍵は、乳幼児期の生活にあるように思われる。このことに関して、汐見稔幸は次のような非常に興味深い指摘をしている^(註4)。

遊びをつうじて育つものは運動能力や、じょうぶなからだだけではありません。五感というのは、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚ですが、子どもたちはあそびをとおして五感を育て、工夫する力や、自然や人とコミュニケーションする力など、さまざまな能力を育てます。これらの能力は「生きていくための基礎力」とも呼べるもので、やる気や集中力、社交性、協調性、ストレスに耐える力などにもつながっていくものです。社会が大きく変わろうとしているこの時代、社会で生きぬくためのこうした「身体力」ほど、必要とされる能力はありません。

身体力は短期間にできるものではなく、子どものころからの遊びやさまざまな体験をつうじて、知らず知らずのうちに、しかもすこしずつつくられるものです。

(汐見稔幸『身体の基本は遊びです』(旬報社：2008年))

近年の日本では、幼児期の教育に関心が高まっている。ただし、多くの人の関心は「より早くから」「より多くの知識を」子どもに教えようとする方向に向かっているのではないだろうか。いわゆる「知識の教授」であるが、忘れてならないことが二つある。第一点は、人間は「身体と精神の活動が一体となった存在である」という大原則があること、そして第二点は、「乳幼児期の教育は遊びや体験を通じた(五感を使った)気づきが基本」ということである。このことに関して村井実は「教える教育の惨めさ」と題して次のように述べている^(註5)。

とりわけ日本においては、教育ということを、何か子どもたちの知らないことがらを子どもたちに「教える」とか、分からないことがらを子どもたちに「分からせる」とか、もっぱらそういった意味での「教える」ことだと思ってしまう(後略)。

村井実『人間と教育の根源を問う』（小学館：1994年）

汐見や村井の指摘は、乳幼児期の教育の本質が身体（五感）を最大限に活用した「あそび」にあることを示している。古くから「遊びは学びである」と言われてきた。夢中になって遊んでいる幼児（大人も含めて）の顔は輝いている。それは「心が躍動している」からである。遊びの醍醐味は「主体的に遊ぶこと」であり、「させられてする遊び」に楽しさはない。

そして重要なことは、楽しく遊んでいるときは、子どもも大人も「もっと楽しく遊ぶためにはどうしたらよいか」と工夫を凝らしていることである。そうして、次々に浮かんでくる「思い」を行動に移して楽しもうとするのではないだろうか。重要な点は、こうした心身の一連の活動が人間の身体能力の向上につながっていくことなのである。

今、必要なことは「幼児期を幼児らしく過ごす」場を設定することであろう。その具体的な方法は、思い切り身体を使った活動をすることである。そのため、先に紹介した汐見稔幸は^(註6)

私たちは文字が読める、うまくブロックを積み上げられる、三角形と四角形と五角形を区別できるといった、目に見えて知的に賢くなったと感じる認知的な能力を重視しがちです。しかし、幼児期に認知的な能力を高めることが、その後の人生の成功や安定につながっているのか、いろいろ調べた結果、あまり関係がないことがわかってきました。大事なことは、うまくいかないときに諦めず「どうしてかな」「こうやってみよう」「これがだめなら、ああやってみよう」など、あくまで目標の達成まで頑張る姿勢を身につけることです。我慢すること、感情をコントロールすることなども大事です。

（NHK すくすく子育て 2017年6月24日放送より）

と述べているし、大豆田啓友も

子どもの自発的な部分を大事にしましょう。さ

せられるのではなく、自分からやっていく中で子どもは育ちます。特に、幼児期の場合は遊びです。子どもたちは遊びこむ中で、やる気、意欲、粘り強さ、探究していく力が身につけていきます。

と重要な指摘をしている^(註7)。このように考えてみると、幼稚園教育要領や保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育保育要領で「あそび」を重視していることの奥深い意味が今更ながら心に響いてくるのではないだろうか。

筆者も数年来、保育における「遊び」や「お手伝い」といった身体活動の意味について指摘をしてきた。筆者は「心身一如を忘れた現代社会と仏教保育……身体活動の持つ意味を中心に……」と題する論文で次のような問題を指摘した^(註8)。

最近、学生と接していて感じるのは、自分の周囲で起こっていることに対する関心の低さや問題意識の欠如である。また、主体的に問題に取り組んだり対応したりしようと思わず、指示されるのを待っている学生が増えてきた。さらに、指示されたことがわからなくても質問しようしない学生も少なくない。こうした主体性・積極性に欠ける学生は、筆者が勤務する短大に限らず、多くの大学生（短大生）に見られるようである。

そして、さらに次のような気になる学生が年を追って増えていることも紹介した。

①授業中の姿勢が悪い。背中を丸めてノートを書く際は机に目が近づきすぎて視力に影響を与えるだけでなく、見た目もよくない。

②挨拶がきちんとできない学生が非常に多い。筆者が指摘したこのような状況に関連して、和田修二（仏教大学教授・放送大学客員教授）が^(註9)、

今日わが国の両親たちは、子どもの上級学校進学のために、早期からの子どもに対する知識の教授に極めて熱心である。このため多くの子どもは、学校と学習塾を往復する多忙な毎日に追われており、加えて高度経済成長期以降のわが国では、人びとの日常の生活環境が高度に技術化、機械化、自動化され、知識の情報化、視覚化が進んだこと

や、伝統的な共同体が崩壊して人びとが機能的に分化し分断された生活を送るようになったこともあって、子どもの家庭内での直接的な生活経験が急速に貧弱で狭いものになりつつある。

と指摘している（『改訂版教育的人間学』放送大学教育振興会：2000年）点が興味深い。

このような状況の中で、平成29年3月に幼児教育（保育）の基本を示す「幼稚園教育要領」と「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」が同時に改正・告示された。今回の改訂（定）では、幼稚園・保育園・こども園の三種類の施設のいずれに在園しても、小学校に入学するまでに育みたい資質と能力が次のように明記されている。

- ①豊かな体験を通じて感じたり、気づいたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- ②気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、タメしたり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- ③心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かううちから、人間性等」である。

これらはいずれも、子どもが友だちや先生と楽しく活動することを通じて育まれる事柄であるから、日々の保育で主体的に身体活動が行えるようにすることが重要になる。このことに関して筆者は以前「仏教保育に期待されること」題して次のような指摘をしたことがある（『日本仏教教育学研究』第16号：日本仏教教育学会2008年）^(註10)。

「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」には〈味わう・体験する・養う・関心を持つ・楽しむ〉といった表現が用いられている（行ということ）にもかかわらず、保護者も園も早期教育に躍起になって、少しでも多くのことを「教えこもう」（学

ということ）のではないだろうか。残念なことに現代の日本では「学」に重点が置かれすぎているために、その弊害がさまざまなところに現れている。

そこで、私たちは改めて「遊び」や「お手伝い」が子どもの成長・発達に及ぼす意味について目を向ける必要があると筆者は考えている。そのことを忘れていると、短大生の心の叫びを受けとめることができないだけでなく、幼児の教育（保育）に禍根を残すことになりかねないのではないだろうか。

註

- (註1) 拙稿「保育科学生の文章表現力について」（『育英短期大学研究紀要』第19号：2002年2月発行）
- (註2) 『分数ができない大学生』（東洋経済新報社：1999年）
- (註3) 秋葉英則『エミールを読みとく』（清風堂書店：2005年）
- (註4) 汐見稔幸『身体の基本は遊びです』（旬報社：2008年）
- (註5) 村井 実『人間と教育の根源を問う』（小学館：1994年）
- (註6) 汐見稔幸「NHK すくすく子育て」（2017年6月24日放送より）
- (註7) 大豆田啓友「NHK すくすく子育て」（2017年6月24日放送より）
- (註8) 拙稿「心身一如を忘れた現代社会と仏教保育……身体活動の持つ意味を中心に……」（『日本仏教教育学研究』第26号：日本仏教教育学会2018年3月）
- (註9) 和田修二（『改訂版教育的人間学』放送大学教育振興会：2000年）
- (註10) 拙稿「仏教保育に期待されること」（『日本仏教教育学研究』第16号：日本仏教教育学会2008年3月）

(2019年1月31日受理)